

ヒヤリハット・きがかかり活動報告(平成20年度及び21年度上半期)

1. 北海道事業におけるヒヤリハット・きがかかり活動の概要

JESCO北海道事業所では、従前から安全活動の一貫として施設・設備の確認および運転管理体制の向上に資するためヒヤリハット・きがかかり活動に取り組み、潜在的な危険源をくみ上げる活動を積極的に展開している。

当事業所の「ヒヤリハット」、「きがかかり」は、現場での気づき事項(仮想でも体験でもよい)である「きがかかり」が作業員等から提出され、提出された内容を吟味し、重要なものを「ヒヤリハット」として抽出(直接「ヒヤリハット」として提出される場合もあり)している。

ヒヤリハット事例	対 策
グローブボックス作業中に、工具が蛍光灯にぶつかりそうになった。	工具が当たらないように蛍光灯にカバーを設けた。
廃アルカリのサンプリング作業に、保護用のゴーグルを持ってくるのを忘れた。	全員にゴーグルとヘルメットへの取付け金具を配布し、常時携帯できるようにした。

きがかかり事例	対 策
中央制御室に地震計の警報は出るが、震度速報を確認できない。	中央制御室控室にテレビを設置した。
遮蔽フード内を移動中、留め金の引っ張りに防護服を引っ掛けて破ってしまう。	引っ張りを養生した。万一防護服を破損したときは、テーピングして退域しすぐに防護服を交換するなどの措置を再周知した。

「ヒヤリハット」については、JESCOと運転会社で対策について議論し、対応を進めている。「きがかかり」については運転会社で主として対応し、社内周知するとともにJESCOへ報告されている。

以下、平成20年度及び21年度上半期のヒヤリハット・きがかかり活動について報告する。

2. ヒヤリハットときがかかりの件数

(1) 発生件数

	平成20年度													計
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月		
ヒヤリハット(件)	9	4	2	3	1	1	0	1	2	2	6	0	31	
きがかかり(件)	—	36	18	7	8	15	23	24	43	12	39	66	291	

参考: 19年度中のヒヤリハット件数: 平成19年12月まで4件、平成20年1月から3月31日まで15件

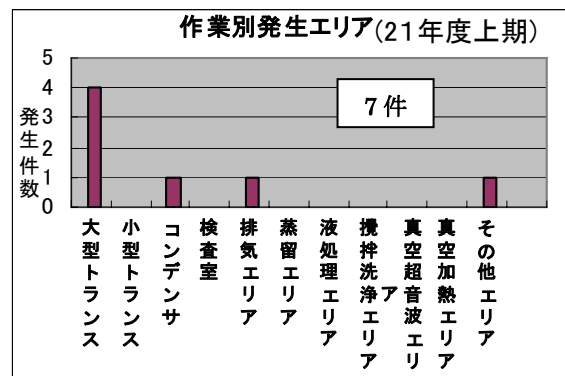
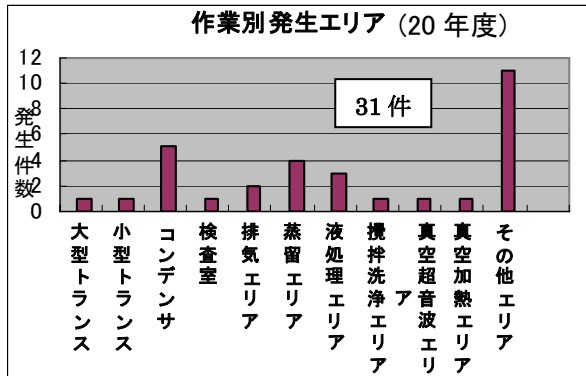
	平成21年度						計
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	
ヒヤリハット(件)	0	3	1	1	1	1	7
きがかかり(件)	44	49	38	48	39	22	240

(2) きがかかり件数の仮想と体験の比率について

- ・ 20年度は、仮想185件(63.6%) + 体験106件(36.4%) = 合計291件
21年度上期は、仮想174件(72.5%)、体験66件(27.5%) = 合計240件
- ・ 習熟度が高まることで、体験の比率が下がってきている。
- ・ 「きがかかり」については作業員に提出の習慣がついてきており、件数は増加している。

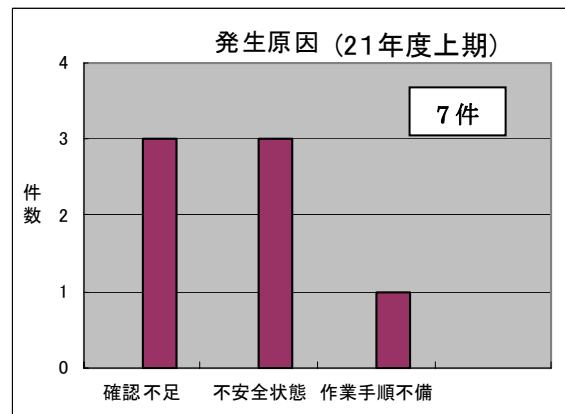
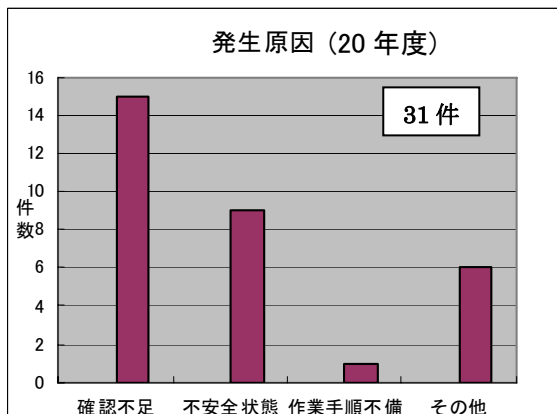
3. 平成20年度と21年度のヒヤリハットの傾向の比較

(1) 職場別



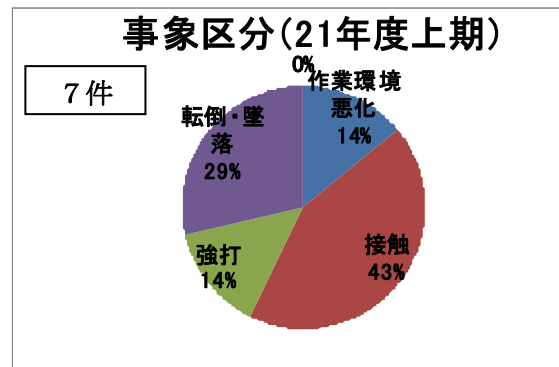
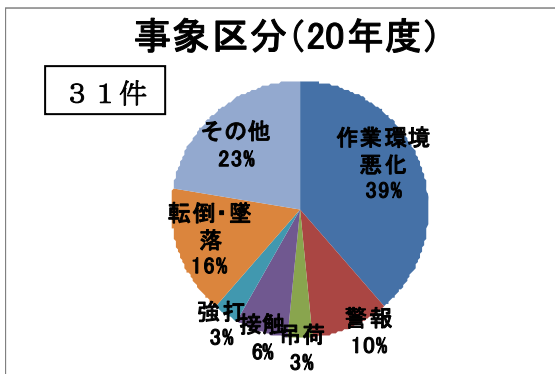
- ・ 20年度はその他エリア(分析室、換気空調エリアなど)が最も多く、全てのエリアでヒヤリハットが発生している。
21年度は大型／車載トランス解体エリアが最も多くなっている。
- ・ 20年度は操業初年度で、設備の使い勝手の悪さや作業員の習熟度不足が考えられる。
- ・ 20年10月の最初の長期定期点検で、設備の改造、作業手順書の改定や禁則事項の充実を図った結果、20年度下半期から件数が減少傾向にある。

(2) 発生原因と傾向



- ・ 20年度は確認不足が発生原因全体のほぼ半数であった。
21年度上期は確認不足と不安全状態(放置するとトラブル・労災につながる事項)が同数であった。
- ・ 確認不足が多かった理由は、作業員の習熟度不足や現場ルールの未整備などが考えられる。
- ・ 21年度は習熟度が上がってきたことに加え、運転会社全員参加の「指差し呼称」活動を年度当初から展開して、確認不足の改善を図っている。指差し呼称活動は各職場の責任者による評価で90%以上の定着率となっている。
- ・ 20年10月、21年2月及び6月の定期点検での設備改善により、不安全状態が解消されてきていると思われる。(定期点検は21年10月も実施している。)

(3) 事象区分



- ・ 20年度は作業環境悪化(放置するとPCBの漏洩につながる事項)が全体の4割を占めた。次いで転倒・墜落につながる事項の割合が高く、直接トラブルにつながるヒヤリハットが多かった。
- ・ 21年度上期は接触につながる事項が最も多く、次いで転倒・墜落につながる事項となっている。
- ・ 接触につながる事項が増えた理由として、設備の増強や配置替えが作業員の動線に影響を与えたことが考えられる。(件数は20年度2件→21年度上期3件)
- ・ 設備の増強や配置替えにあたっては、作業員の動線を考慮する必要がある。

4. まとめ

20年度は操業初年度であり、ヒヤリハット件数が多かった理由として設備の使い勝手の悪さのほか、作業員の習熟度不足及び現場ルールの未整備などが考えられる。

21年度はこれらが改善されてきており、きがかりの件数は多いが、ヒヤリハットとして抽出された件数は9月末時点で昨年同時期の半数以下(20件→7件)となっている。

設備の改善や作業手順の整備によるヒヤリハットの芽を摘む取り組みと合わせて、ヒヤリハット・きがかりを提出しやすい環境づくりを継続していくことが必要である。

今後もヒヤリハット・きがかり活動を有効活用し、施設の安全性の改善を図っていく。

以上